

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	第二十八回記念式を歡びて龍南を歌ふ
Author(s)	塩谷, 安喜
Citation	龍南會雜誌, 168: 135-138
Issue date	1918-12-25
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6856
Right	

詩情は掬みて盡させざる

今日のつごいの尊さよ

9 往時の榮の繪巻物

くりて笑ふか月見草

夕月戀ふる下陰に

昔偲ぶの歌よべば

松籟共に凝りなして

紀念の祝歌や響くらむ。

第二十八回紀念式を歡びて龍南を歌ふ

一、三、甲二

鹽

谷

安

喜

緑の露を湛へたる、松の樹の間、

明けゆく空のさす日の光に、

粲たる姿、不磨の明星の、

美はしきかも眼塔のごと、

時は未し、松の奏も音やめて、

録の草も和平^{やはら}ぎ伏せど、

千古の雪と永劫の日と、

抱きて俯せる大阿蘇の、心に似たる朝の思ひ、

煉瓦の高樓古りたれど、

光明、曙の日の如と燦かむ、

静寂、さながら眠れる海なれど、

限なき深き心の秘めたるを、

嗚呼健なる龍南の、永久の誇ここにあり。

銀の衾の岡の龍嶺の、樹々の囁起る時、

貴き城の龍南に、渦巻く波、

強き諧調のその流れ、

映しき光のその恵み、

ゼウスの神の宮居の邊、若き生命の競ひたる、

九の術、こゝに努めむ、榮ある魂、

其錐の鋒先に、觸るゝ高鳴の、

白晝に轟く雄々しき行進の曲、

躍り出づる不思議の力を生命とし、

光明を照らす、若き心を一にして、

時の流れに湧きかへる、

薫る功の莊嚴さ、

嗚呼龍南の、新しき榮こゝにあり、

綾絹に暮るゝ金峰の榮に胸赤々と染りつゝ、

萬有の、心こめたる暫くの、

この世の詩のひらめきひきいれて、

聲なき聲に沸き立つ血潮よ、

おゝ、尊き流れ、白河の、

傳ふる夜の琴の緒の、

新しき糧のしるべには、

夢結びたる心にも、やさしき調に驚かさるゝ、

野に咲ける一輪の花をも尊しと、

胸に響ける詩の言葉に、
心に傳ふる自然の聲に、
小さき魂、無量の愛に目覺めゆく、
嗚呼清き龍南の、眞の情ここにあり、

此の詩龍南の實生活を歌ひて更に一節これを統一し祝歌の意を添ふる豫定なりしもこれを他日に期することなしぬ。

第二十八回紀念式恭賦

一、三、甲二 鐵甕 今 田 哲 夫

鍊磨奮勵豈無功。

八百健兒氣概同。

才藝花開新教育。 心身秋鍛古英風。

讀書潑眼平生在。

競技博譽今日中。

壯快如茲眞記念。 師恩海岳仰無窮。

紀念運動會有作

不問坤輿要豹韜。

秋風十月試人豪。

龍驤虎躍誰能手。 玉振金聲總俊髦。

綽綽胸量分勝敗。

堂堂抱負紀薰陶。

武夫原上回頭望。 萬丈噴煙蘇嶽高。